東日本大震災から10年　▶防災特集◀

「いのちを大切にする安全な社会づくりをめざして」

――一般社団法人健太いのちの教室設立記念

専修大学でシンポジウム

専修大学（東京都千代田区）法学研究所、同大学法社会学ゼミナール、一般社団法人健太いのちの教室は3月6日、オンラインで、シンポジウム「いのちを大切にする安全な社会づくりをめざして」を開催した。このシンポジウムは、2011年3月11日に発生した東日本大震災で犠牲になった同大学卒業生の田村健太さん（平成20年法学部卒業・当時25歳）の両親の田村孝行・弘美夫妻が中心となって2019年12月設立した「一般社団法人健太いのちの教室」（宮城県）の設立を記念して開催された。

（健太いのちの教室代表理事・津波事故遺族）田村孝行・弘美夫妻が講話

大切な命を守る企業防災・組織防災

当日は田村夫妻（「健太いのちの教室」代表理事・七十七銀行女川支店津波事故遺族）、美谷島邦子氏（「いのちを織る会」代表理事・日本航空123便墜落事故遺族）、市川正子氏（「赤とんぼの会」代表・シンドラー社エレベーター死亡事故遺族）、加山圭子氏（「紡ぎの会」代表・東武伊勢崎線竹ノ塚駅踏切死傷事故遺族）、永野海氏（静岡・中央法律事務所・弁護士・日弁連災害復興支援委員会副委員長）、飯考行・専修大学法学部教授、コーディネーター）、柳田邦男氏（作家・評論家・まとめ）がシンポジウムに出席した。

【田村孝行・弘美夫妻の講話「七十七銀行女川支店津波事故訴訟と亡き息子・健太との思い出」】

東日本大震災から10年を経機に、田村夫妻がこれまでの活動の歩み、同教室の発足などについて報告を行った。

同銀行（宮城県女川町）は女川湾から100メートルしか離れていなかった。近くには高台があり、指定避難場所にもなっていた。東日本大震災当日、避難場所の高台に避難せず、同銀行支店の屋上（2階建て高さ10メートル）にとどまるように支店長に指示された行員12人（行方不明8人）が犠牲になった。

田村孝行・弘美夫妻

田村健太さんもその1人だった。田村夫妻は「なぜ目の前に高台があったのに逃げることができなかったのか、なぜ支店の屋上とどまったのか、疑問が残った。真実を知りたかった」と疑問を述べる。銀行の事後対応について、銀行と家族とで話し合うが、銀行管理下で起きた大きな労働災害と受け止め、夫婦は裁判に踏み切った。しかし、田村夫妻の思いは届かず、最高裁で上告が棄却された。

田村夫妻は「企業防災は人名優先・共助・安全が確認されたら事業継続、そして事前の準備、命を守る備えが、最も重要だと感じている。万が一、従業員の身体生命に死傷があった場合、企業は罹災者と同じ目線で寄り添い、原因究明と改善が必要と痛感している。このような安全計画と罹災者支援を両輪としたものが、今後に兼ね備える本当の危機管理マネジメントと考える」と述べた。

講話の最後に田村夫妻は「企業は人命を最優先にする組織をつくってほしい。命を守る取り組みに終わりはない。出会いの中で多くのことを学び支えとなった。感謝を忘れない。これからも活動を精いっぱい続けていく」と述べた。

各事故の遺族等がパネリスト

一番の弱みはどこかを考えた対策を

オンラインで行われたシンポジウム

【パネルディスカッション】田村夫妻との交流や各活動について報告が行われた。

美谷島さんは1985年の日航機墜落事故で9歳の息子を亡くした。現在、航空機事故の安全確保や遺族のサポートに向けた活動を行っている。「安全な企業組織にするために何ができるのか、改めて考えさせられる。リーダーの判断が大切だと思う。事故が起きた場合、被害者を支援することが大切なことが分かる」と述べた。

加山さんは2005年の東武伊勢崎線竹ノ塚踏切事故で実母を亡くした。踏切事故発生時には自ら事故現場に出向き、事故原因の改善に向けた活動を行った。「二度と同じ事故を繰り返さないようにということを伝えたい」と話す。

市川さんは2006年のシンドラーエレベーター事故で16歳の息子を亡くした。エレベーターの安全確保に向けた活動をしている。「時間がたつと事故を忘れてしまいがちだ。今後も警鐘を鳴らしていく」と話す。

永野弁護士は東日本大震災を教訓に津波から命を守るための三つのS「SWITCH（避難のスイッチが入ったかどうか）・「SAFE（安全な避難場所に避難できたか）」・「SAVE（避難後も命を守りぬけたか、帰宅・引き渡し等）」――を紹介。「一番の弱みがどこかを考え対策を立てることが大切だ」と述べた。

健太いのちの教室世話人がメッセージ

【「一般社団法人健太いのちの教室」世話人】

▽一般社団法人大船渡津波伝承館・斉藤賢治館長▽㈱まちづくり計画研究所・渡辺実所長▽宮城教育大学・武田真一特任教授▽大坂市立大学大学院・高橋眞名誉教授▽熊本学園大学社会福祉学部・高木亨准教授▽金沢大学・井出明准教授▽徳島大学人と地域共創センター・井若和久学術研究員▽兵庫県立大学減災復興政策研究科・室崎益輝科長▽愛媛大学法文学部・小佐井良太教授▽和歌山大学災害科学・レジリエンス共創センター・宮定章特任准教授▽金沢利活動法人まち・コミュニケーション代表理事▽東京千代田法律事務所・大城聡弁護士▽北見法律事務所（仙台）・北見淑之弁護士▽さとう法律事務所（仙台）・佐藤靖祥弁護士▽千葉達朗法律事務所（仙台）・千葉達朗弁護士

世話人からは「トップが防災意識を持たなければならない」「どのような行動が防災になるか伝えていきたい」「悲しみをしっかりと伝えることが重要だ」「多くの若い人に防災について学んでほしい」「次の災害に備えるために『健太いのちの教室』は大切だ」「『健太いのちの教室』の活動を手伝っていく」などのメッセージが寄せられた。

最後に作家で評論家の柳田氏がシンポジウムのまとめを行った。柳田氏は事故犠牲者遺族とともに歩み、航空機事故、医療事故、災害、戦争などについてドキュメントや評論に取り組んでいる。柳田氏は「被災者・被害者の意識の社会的意味付けが大きく変わってきたこと」「専門家などの多様な意見や取り組みは画期的なこと」「行政や企業に変化が出始めていること」「被災者・被害者の悲しみは消えるものではない。悲しみは後戻りするものではなく、明日を捉える原点だと思う」――の4点を指摘した。

経験を
に伝える
ミュージアム

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター（兵庫県神戸市）」は、震災の教訓と経験を後世に伝える防災学習施設として平成14年に開館し、小・中学校などの学校団体を中心に、年間約50万人が来館している。

＝東館3階＝

そのような状況下では、東館3階のリニューアルされた「ハザードVRポート」、いざというときの判断が本当に正しいか○×で答える「クエスチョンキューブ」など、最新の防災知識を楽しみながら学ぶことができる。これから起こり得る災害に備えるが、実際に起きた災害から学ぶことは多い。わずか十数秒の揺れによって、まちやそこに暮らす人々がどのような被害を受け、どう復旧・復興へ向かっていったのかを学んでおきたい。

近年、日本では地震、火山、豪雨等さまざまな災害により甚大な被害が

災の経験と教訓、
切さを発信する災害ミュージアム
学校の修学旅行、校外学習にも最適
興への道　西館3階
防災・減災ワークショップ　西館2階
こころのシアター　東館1階
TOPICS
・毎月17日（休館日の場合は翌18日）は入館無料
・下見観覧も随時受付!!